

狂言「かくすい」考

大谷 節子

はじめに

「かくすい」という名の狂言がある。現在は和泉流のみが現行曲とし、「角水」の文字が宛てられている。『狂言集成』の底本となった幕末の和泉流三宅派の写本には「角水掣」の名で収録されているように、掣取りを扱った狂言であるが、類曲「賽の目」に比しても上演される機会はきわめて少ない。その最大の理由は、「かくすい」が何を意味するのか、不明な点にある。かつて佐竹昭広氏は次のように述べた。

狂言という文字が示すように、狂言は「をかし」の芸能であった。中世には狂言のことを「をかし」と称した例も少くない。「をかし」の性格は、「すべて猿楽の態、鳴濤の詞、腸を断ち頤を解かずといふ者なし」(『新猿楽記』)といわれた古猿楽以来、狂言をつらぬく本質的な伝統であった。狂言には、ことばの「をか

し、物まねの「をかし」、趣向の「をかし」、誇張の「をかし」など、あらゆる種類の「をかし」が、いろいろなかたちで盛りこまれている。「をかし」の性格を欠いた狂言というものは存在しえない。「をかし」をふくむ度合、「をかし」のニュアンスには多少・濃淡があっても、「をかし」の性格はどの狂言についても例外なく指摘されうべきものである。社会・風俗・感覚のことなる後世から見ると一向に「をかし」くない狂言も、研究が進むにつれて、「をかし」さの由来はあきらかになる。

〔下剋上の文学〕筑摩書房、一九六七年⁽¹⁾

この「かくすい」もまた、「をかし」くない狂言となってしまった作品の一つである。狂言「かくすい」の「をかし」は、どこにあったのだろうか。

一

狂言「かくすい」は、天正狂言本、祝本には収録されておらず、近世以前の台本は現存していない。和泉流では最古本である天理図書館蔵『狂言六義』（正保三年頃写。以下、天理本と略称）に「かく水」、大藏流では大藏弥右衛門氏蔵大藏虎明本（寛永十九年写。以下、虎明本と略称）に「かくすいむこ」の名で収録されるのが初見となる。一六四〇年代に筆録されたこれらの写本には、「角水」の文字は使われていない。万治三（一六六〇）年刊行の『狂言記』正編も、この作品を「かくすい」と仮名書きで収録している。鶯流では、延宝忠政本や享保保教本には含まれず、鶯伝右衛門派の名女川辰三郎が宝暦十一（一七六〇）年頃に筆写した宝暦名女川本が最も⁽²⁾

古い台本となるが、ここに「角水聳」の表記が見られる。しかし、享保六（一七一六）年閏七月に鷲仁右衛門家が幕府へ提出した書上では、「俄二難相動分」として付記する十九曲の中に「かくすい聳」と仮名書きが記されていることから、「角水」の宛字が後世の所為であることは疑いない。⁽³⁾ この作品の「をかし」を探る手掛かりは、「かくすい」の意味を明らかにすることから始めなければならない。

先ず天理本「かくすい」の全文を掲出する。

「是は此あたりの者」、うとくなるよしを云、「ひとりむすめを持たが、よからうずるむこをとらう」と云、「さりながら、むすめが事の外歌道をすいたほどに、たれにはよるまじい、歌道のすぐれた人をむこにとらうと存る。則、此ていを高札にうたばやと存る」と云て、高札を打。

一人出て、「是は津の国の者」と名乗、「あたりちかひ所にうとくなる人がある。ひとりむすめをもたる。たれにはよるまじい、歌道のある者をむこにとらうと高札をうたれたと申。それがしはずいぶん歌道をこゝろがけたほどに、まいり、むこにならふと存る」と云て出る。一二へんまわりて、シカく。常のごとく、あんないをこう。しうと出る。「いかやうなる人ぞ」と云。「高札の面について、津の国よりまいりたる」と云。「御出、忝い。まづこなたへとおらせられい」と云て、わき正面になおす。

又一人出て、「はりまの国の者」と云、右のごとく云て出る。しうとよび出す。右のごとく、是も脇正面になをす。

また一人出て名乗。太夫也。名乗もいづれも同じ事也。しうと出てあいしらい、右のごとく、次第く

脇正面になをす。

扱しうと云、「いづれもこれへ、おのく遠路御出忝い。高札にもしるすごとく、どなたにはよるまい、歌道のたつした人をむこにとらうと申事じや。それをきこしめされてお出なさるゝ衆にてあるほどに、おろかにはあるまひ、さりながら歌を一首づつうけたまわつて、いづれ成とも、うたのきゝ事なるを、むこにとりまらせうず。是と申も、それがしの歌道をこゝろがくるに、又むすめが別して歌道をすくによつての事じや」と云。

いづれも三人ながら、「札の面についてまいりたる上は、いかやうにもうたをよみませうず」と云、「さらば、それがし歌のだいをだしまらせう」と云、「ちかごろ」と云、しうと、「かくすい」と云だいを出す。「さらば、こなたからあそばせ」と云て、じきする。ていしゆ、「いやくそれがし申さう。せんしだいになされい。津の国のがはじめに御出あつたほどに、津の国からあそばせ」と云、「尤」と云て、

津の国

にしの海ちいろのあみをかくすいて水はくゞりてうをはとゞまる

はりまの国

はりま紙いかなるひとのかくすいて筆ははしりて文字はとゞまる

川内

川内なる早田を人のかくすいて一本植て千本にぞなる

を云、しうと「いづれもきゝ事をあそばされた。わたくしもおどろき入た」と云、「どなたをどなたと申さうやうはないほどに、此上は、とかくむすめをよびだして、脇のいざにをく。

たいめんも「先次第」と云て、津の国よりあふて、「あらこわ物、あのやうなおそろしいかおな女房には、一日もそわれまい」と云て、いぬる。やはりまもあふて、右のごとく云て、いぬる。シカく。シテか

わちはひとりつかまへられて、いづれも〈さいの目〉のごとくにて、留る也。

（北川忠彦他校注『天理本 狂言六義』上巻 三弥井書店、一九九五年。引用に際して適宜私に改行等の体裁を整えた）

後に比較する虎明本に比して、右天理本「かくすい」はセリフの省略が多いが、筋を辿る上で欠けるところはない。以下、粗筋を辿る。「このあたりの」「有徳なる」者が智を募る高札を立てる。この有徳人の一人娘が歌道を好むため、「歌道にすぐれた人」を智に取ろうというのである。高札の噂を聞いて、撰津、播磨、河内の国から「ずいぶん歌道をこゝろがけた」三人の者がやってくる。娘が歌道好きとなったのは、有徳人（以下、「舅」と称す）自身が歌道を嗜むためであり、この歌好きの舅は、智志願の三人の内、最も優れた歌を詠んだ者を智にしようと、「かくすい」の題を出す。三人は順番を譲り合うが、舅は歌を詠む順を「⁽⁴⁾先次第」とし、到着順に津の国⁽⁴⁾の者から歌を詠ませる。

津の国の者

にしの海ちいろのあみをかくすいて水はくゞりてうをはとゞまる

播磨の国の者

はりま紙いかなるひとのかくすいて筆ははしりて文字はとゞまる

河内の国の者

川内なる早田を人のかくすいて一本植て千本にぞなる

三首はいずれも「かくすい」の四文字を詠み込んだ歌で、「網を結く」とは網の目を結んで網を編むこと、「紙を漉く」とは製紙、「田を鋤く」とは耕作のこと。それぞれ「かくすい」を物名（ものな）（隠題）とし、各々の国の景物によそえて、津の国の者は千尋の網を作つて魚を捕る海辺の景を、播磨の者は名物の紙を産して筆を走らせる景を、河内の者は田を耕して稲穂を実らせる景を詠んでみせた。しかし、歌の優劣が付け難いので娘の「目好き（5）」にしようとして、舅は三人を到着順に娘と対面させるが、各々娘の「おそろしいかお」を見て逃げる。最後に対面した河内の者がつかまり、娘に負われて留め。

右「かくすい」は「賽の目」「夷毘沙門」などの掣取り物の類型の一つであり、結末は「二九十八」「因幡堂」など妻乞物と呼ばれる狂言とも共通する。この狂言の核になっているのは掣志願の者たちが詠む三首の歌であるが、舅がなぜ「かくすい」なる題を出したのか、右の天理本では特に説明はなされていない。

二

次に、大藏流の最古本である虎明本「かくすいむこ」が右の天理本と相違する点を見ておく。天理本に同じく虎明本の舅も、「財宝に付て、不足な事はござらぬ」と豪語する有徳人として設定されているが、この有徳人の名前を虎明本は「かくすい」と説明する。掣を募る理由として「かくすい」（以下、天理本に同じく「舅」と称す）が男子を持っていないことを挙げるのは天理本と同様であるが、虎明本は一人娘に歌道の優れた者を掣に取る理由として、自らが「文盲」であることを付け加えている。

罷出たる者は、此所にすまる仕る、かくすいと申者で御ざる。某、ざいはうに付て、ふそくな事はござらぬ。去ながら男子をばもちまらせぬ。女子一人もつてござるが、それがしもんまふにござるほどに、歌道のすぐれたる者をむこにとらふと存る。先、高札をうたふ。

(大塚光信編『大蔵虎明能狂言集 翻刻註解』清文堂、二〇〇六年)

髻を募る高札の噂を聞いてやって来るのは、河内の百姓、淡路の漁師、播磨の紙漉きの三人。各々「せがれの時より」⁽⁶⁾「明暮」⁽⁷⁾「わざになあはぬ」⁽⁸⁾歌道を好む者たちである。「津の国」が「淡路の国」に変わって、三人の国元は河内と淡路と播磨。天理本では明示しない職が加筆される。三人が揃ったところで、髻選びのために舅が歌を詠ませる展開も天理本に同じであるが、虎明本の舅は、「文盲」で題の出し方を知らぬからと、我が名の「かくすい」を題と定め、さらに各自の国の名と「すぎはひ」(生業・職)を詠み入れることが課題として付加される。

わたくしは、もんまうに御ざるによつて、歌道の達者な人をむこにとりたひとぞんじての事で御ざる。題のいだしやうもぞんぜぬ。すなはち某が名をば、かくすいと申まらす程に、私が名をだいになされて、めんめんのお国の名、かたぐのすぎはひを入れて、歌を一首づゝあそばせ。それを承てむこにとりまらせう。

こうして淡路（天理本では津の国）の髡志願の者が詠んだ歌は、舅の課題に対応して、上五文字が「西の海」から「淡路なる」に変わり、三首は到着順に従って「河内」「淡路」「播磨」の国の物名の歌として揃えられる。

かはちなるわさ田を人のかくすいて一もとうへてちもとにぞなる

淡路なるちいろのあみをかくすひて水はくゞりてうをぞとゞまる

はりまがみいかなる人のかくすひてふでははしりてもじぞとゞまる

この三首の歌の出来に関して舅が優劣を付けない点、娘と対面した後の展開は天理本と同じであるが、虎明本は対面する順を籤引きとする点が異なっている。⁽⁹⁾

以下に、古写本による二流の相違をまとめる。⁽¹⁰⁾

①有徳人が歌道に優れた人を髡に取ろうと高札を打つ（天理本は舅と一人娘が歌道を好くため。虎明本は舅自身が文盲のため）。

②高札の噂を聞いた津の国の者が髡を申し出る（虎明本は淡路の漁師。三者の到着順は④②③）。

③同じく播磨の国の者（虎明本は播磨の紙漉き）が髡を申し出る。

④同じく河内の国の者（虎明本は河内の百姓）が髡を申し出る。

⑤舅は三人に一首づつ歌を詠ませて髡を決めることとし、題を「かくすい」とする。（虎明本は舅が文盲のために題が出せず、自分の名前「かくすい」を題とした上で、さらに国名と生業の名を詠み込ませる）。

⑥三人は互いに順番を譲り合うが、舅の提案によって到着順に歌を詠む（虎明本は「西の海」詠の初句が「淡路なる」）。

⑦舅は、優劣付け難いので娘に選ばせることとし、三人は順（天理本は到着順。虎明本は籤引の順）に対面するが、娘の「恐ろしい顔」を見て逃げる。

虎明本は、「かくすい」を舅の名前とする点が大きく異なっているが、「かくすい」なる名前の由来は依然として明らかではなく、虎明本によっても「かくすい」の謎が解けることはない。むしろ虎明本は、「かくすい」の意味がわからないために、これを舅の名前と説明して辻褄を合わせようとした可能性が高い。では、そもそも「かくすい」とは、何であろうか。

三

先に見たように、天理本に拠れば三人の聲志願者は、舅が出した「かくすい」の題に対して、「かくすい」を物名（隠題）とし、それぞれ「かく」の如く「すく」（結く・漉く・鋤く）と、自らの国の景物によそえた歌を詠む。

しかし、舅は「かくすい」という題で歌を詠めと言ったのであり、このような物名の歌を詠めと言ったわけではない。そもそも聲取りの条件として課せられた和歌である。ならば、その和歌は娘を恋ふる歌、すなわち求婚の歌でなければならぬ。まだこの時点では、三人は誰も娘の顔を拝んではない。しかし、未だ見ぬ相手に胸を焦がす歌を詠むのは、恋の歌の常套である。三人の内、誰が一番、恋の心を巧みに詠むことができるか、好ききの舅はその力量で聲を選ぼうとしたはずである。詠まれた三首は、一見恋の歌とは見えない。これら三首が恋

の歌であるためには、三首に共通する表現である「かくすい」が、恋の意味を持てばよい。とすれば、「かくすい」の「すい」は「好い」であり、「斯く好い」⁽¹⁾た、すなわち「このように好きだ」と、思いの丈を述べよという課題が、舅の出した歌題だったのではなからうか。

もちろん、正統な和歌に「かくすい」などという題があるはずもない。国の名によそえた歌の題であれば、たとえば「寄国恋」とでもすればよいのである。「この辺りに住む」「有徳なる」舅は、自らを「歌道を心がくる」者と名乗ってはいるが、もとより真つ当な歌人ではない。しかし、少なくともこの歌好きの舅は、恋の和歌が「男女の仲も和らげ」(『古今和歌集』 仮名序) することを知る者であった。

三人の智志願者もまた、和歌にこよなく心を寄せる者たちであった。舅が「かくすい」に込めた意図を解すことができたかどうか甚だ心許ないが、いずれにせよ直接に恋の歌を詠むことはできなかった。しかし、苦吟の末に詠んだ歌は、「かくすい」を物名(隠題)にして、津の国の者は「網を結いた」、播磨の国の者は「紙を漉いた」、河内の国の者は「田を鋤いた」と国元の営みを述べて、結果的に自らを語り、自身を売り込む内容になっている。この三首は、一見恋心とはかけ離れた狂歌ではあるが、津の国の者は、海に大きな網を仕掛けて大量の魚を捕る豊漁の喜びを、播磨の国の者は、墨を含ませた筆を走らせれば誰もがその上質さに感服する紙を漉く矜持を、河内の国の者は、丁寧に田を耕して粃を千倍に増やす豊作のめでたさを謳い上げている。天理本は各々の職を明示してはいないが、「津の国の者」「播磨の者」「河内の者」がそれぞれ漁師、紙漉き、百姓を生業とし、その職・業を歌に詠んだとみなすに不都合はない。虎明本が、わかりやすく説明を加えたと考えてよいであろう。

そもそも有徳人は、「たれにはよるまじい、歌道のすぐれた人をむこにとらう」と高札を立てた。三人は、「た

れにはよるまじい、歌道のある者をむこにとらう」という高札の評判を聞いて集まった歌好きであった。有徳人は三人を前に、もう一度言う。

どなたにはよるまい、歌道のたつした人をむこにとらうと申事じゃ。

重要なセリフ以外は簡略に粗筋を記す天理本の表記の中で、右の一文は一語も省略されることなく、三度にわたって書き付けられている。言い誤ってはならないキーフレーズだったのである。つまり、有徳人の智選びは、国も、身分も、職も、年齢も、姿も、何も問わない、和歌至上主義に基づくものであったことを示している。そして、三人の聲志願者が詠んだ歌は、見事にその条件の基準を超えていたのである。

繰り返すが、三人が「かくすい」の意味を理解していたかどうかは定かではない。にも関わらず三人は、「かくすい」を物名として、来る日も来る日も「すき」続ける日常を詠み、見事に求婚の歌が生み出された。自らの職を果たし、その日常を詠むことで、巧まずしてこれが歌の道に叶い、自ずから求婚の歌と成り、難題を克服したのである。「物名」⁽¹²⁾の力、「ことのは」が持つ力である。

四

「雅」の物語においては、未だ会わぬ恋心を詠んだ和歌が、麗しい男女の仲立ちとなり、二人は結ばれるので

あるが、狂言「かくすい」では、網や紙や田を「す（結・漉・鋤）く」狂歌を詠んだ三人は、麗しいはずの未だ見ぬ女の正体が判明するや、逃げ惑う。狂言「かくすい」の「をかし」は、まずはこのように、「雅」である和歌世界を「俗」へと反転させたところにある。「雅」の世界を陰画とする「をかし」は、そもそも「雅」の世界を知らなければ、「をかし」くも何ともない。

「かくすい」が「斯く好い」であり、恋の歌の本意を詠めという舅の意向を取り違えたところに狂言「かくすい」の「をかし」はあつたが、「かくすい」に込められた意味が不明になると、「をかし」は自ずから消滅する。

「かくすい」の四文字を舅の名前と説明する大藏虎明本の舅は「文盲」と記されている。有徳なる財を全て讓る重要な掣選びの条件を「歌道のすぐれた者」と掲げた天理本「かくすい」の舅は、自身が歌に親しむ和歌至上主義者であつたが、ここにいるのは財宝はあれども和歌を解さぬ金満家である。当然、天理本においてそれほど重要なセリフであつた「どなたにはよるまい、歌道のたつした人をむこにとらう」は失われ、自らの無学を補うために「歌道のすぐれたる者」を探す舅に成り下がっている。天理本において、舅が掣志願の三人に「斯く好い」の題で歌を詠ませたのは、娘への求婚の熱意を押し量る手段であつたが、もはや虎明本の舅は娘への恋心の内実など問うてはいない。代わりに問うたのが国と生業の名であつた。

このように、虎明本の形が天理本より後出の変化であることは明白であるが、虎明本は「かくすい」の意味が不明になったことよつて消失した「をかし」を補う処置を施している。歌に国と生業を読み込むことを課し、詠み手を生業の者と明示したことよつて、「河内なる」の歌は、「農作」の技術を誇らしげに歌い上げて、自ら「農人」であることを高らかに表明する歌であることがより明確になった。二首目の「淡路なる」も三首目の

「播磨がみ」の歌も同様である。自らの職を謳歌する三人の競演は、職人歌合を彷彿とさせるものであり、自らの職を讃える「めでたさ」は虎明本に、より際立っているといえる。

「をかし」と「めでたし」は、狂言を担う両輪である。そもそも天理本「かくすい」も、前章でみたように、粛々たる職の日常を詠むことが自ずから求婚の歌と成る和歌のめでたさ、見事に詠まれる和歌が有徳をももたらすめでたさ世界を描いている点においては、「めでたし」を表現した狂言であった。その上で、虎明本の「かくすいむこ」とは、「をかし」から「めでたし」へと、軸足を移す指向性によって改変された本文であったということが出来る。

五

大蔵虎明本には、この「かくすいむこ」（和泉流でいう「かくすい」とは別に、「かくすい」という名の狂言が収録されている。

初めに概略を記しておく。

- ① 津の国の百姓が登場し、例年の通り、塩の鯛十懸を御年貢に上げようという。
- ② 播磨の国の百姓が登場し、例年の通り、御教書の紙十束を御年貢に上げようという。
- ③ 河内の国の百姓が登場し、例年の通り、早稲田の米十俵を御年貢に捧げようという。
- ④ 三人は道で出会い、同道して揃って御年貢を納める。

⑤ 三人は「かくすい」の題で年貢によそえて歌を詠めと命じられ、歌を詠む。

⑥ 三人は歌を見事に詠んだために万雑公事が免ぜられ、酒が下される。

⑦ 三人は洛中を舞いながら下向する。

これは、「餅酒」や「昆布柿」など百姓狂言と呼ばれる狂言の一つとして仕立てられた作品である。三人の国名と詠歌が狂言「かくすい（大蔵虎明本では「かくすいむこ）」とほぼ同じであるが、その「先後関係などは不明」⁽¹³⁾とされている。

三人の百姓が、国元から都への途上で出会い、一緒に年貢を納めるところまでは百姓狂言の定型であり、百姓狂言における大蔵虎明本「かくすい」の独自部分は、三人が納めた年貢によそえて歌を詠む場面である。

（奏者） やい／＼三ヶ国のお百姓、是へまいれ。おほせ出さるゝは、三ヶ国のお百姓、一度に御年貢を上る事めでたうおぼしめす。しかればお歌の御会のおりふしもつて参り合てある程に、かくすいと云、歌の題を下さるゝ間、三ヶ国のお百姓、此題にて、めん／＼のみねんぐによそへて、うたを一首づゝよみまいらせいと御事じや程に、急いでよみませい。

みつのうら千尋のあみをかくすいて水はくゞりて魚はとゞまる

はりまがみいかなる人のかくすいて筆ははしりて文字はとまれり

河内なる早田を人のかくすいて一もとうへてちもとにぞなる

津の国の百姓の御年貢は「鯛」、播磨の百姓の御年貢は「紙」、河内の百姓の御年貢は「米」という設定であるが、津の国の百姓がなぜ鯛を、播磨の百姓がなぜ紙を捧げているのか必然性を欠く。百姓狂言の虎明本「かくすい」が、これまで見てきた狂言「かくすい」に先行するのであれば、一首目の津の国の百姓の詠には「魚」ではなく「鯛」が詠み込まれるのが自然であろう。この作品において「かくすい」の四文字に意味を見出すことはできず、そもそも歌の御会を行う歌人が「かくすい」という題を出すことは考え難い。

これらの点を以てしても、この百姓狂言「かくすい」が髣髴の狂言「かくすい」に先行する可能性は消し去ってよい。そして、これまで見てきたように、狂言「かくすい」が、本来「斯く好い」という題で恋歌を詠むことを課されたにも関わらず、意味を取り違えて各々同音異義の「かくすい」を詠んだ「をかし」と、職の日常を詠んだ物名の歌が巧まらずして自ずから恋の歌と成り舅の目に叶う「めでたし」の狂言であったものが、「かくすい」の意味が不明となり、国の名を寿ぐ「めでたし」の狂言へと軸足を移していったことを想起するならば、そのめでたさを指向する延長線上に、百姓狂言「かくすい」が作られたことは、自ずと明らかであろう。

醜女に追いかけられる髣髴の狂言「かくすい」の悲惨な結末は、「めでたし」には邪魔であったが、百姓狂言への改変によって「かくすい」の歌は、万雑公事免除と御酒三盃下賜という、めでた尽くめの大団円をもたらし、完結する。盃を受けた百姓たちが下向途中に歌う歌は、喜びに充ち満ちている。

やら／＼めでたや／＼な。たうどにまさる日の本なれば、君安全に、民もゆたかに納るみ代の、しるしとて、国々在々所々よりも、さゞぐるみつき、幾久しさも、かぎりじな、いくひさしさもかぎりじと、申納て

かへりけり

君安全に民も豊かに治まる御代のしるし——これは他ならぬ和歌を褒めることばであった。

「をかし」は、確かに狂言の核に存在する最も重要な要素である。と同事に、狂言の深部に存在するもう一つの核、それは「めでたし」である。「をかし」を失った髷取の狂言「かくすい」は、今一つの極である「めでたし」の芽を伸ばして、百姓狂言「かくすい」を生んだのである。

注

- (1) 『佐竹昭広集第四卷 閑居と乱世』(岩波書店、二〇〇九年) 再録。
- (2) 檜書店蔵。北川忠彦・関屋俊彦「鰯刻鷲流狂言『宝曆名女川本』一〜六」(『女子大國文』一〇五〜一一〇号)に鰯刻。
- (3) 享保六年書上の名女川本辰三郎筆写本は、「角水聳」の字が宛てられている。
- (4) 『天理本 狂言六義』上卷(三弥井書店) 頭注は「じきする」として辞退するの意とするが、「辞儀」で譲り合うと解すべきであろう。
- (5) 天理本は「目づき」の表記であるが、注(4) 前掲書頭注が指摘するように「目好き」の仮名の混用と見る。
- (6) 罷出たる者は、河内の国の百姓でござる。只今是へ罷出事別の事でもござなひ。和泉の国にかくれもなき、かくすいと申てうとくくなる者の有が、ひとりむすめをもつて、ぬしが歌道にすひたほどに、歌道の達者なるものをむこ

にとらふと、高札をうたれたと申。某は百姓のわざにはあはぬ事にすひて、しんたい何ともまかりならぬ。かのもの、所へまいつて、むこにならふと存る。

(7) 是は淡路の国のれうしで御ざる。某れうしの身ながら連歌にすひて、明暮歌道をたしなみまらすれ共、こゝもとの事で御ざれば、けつく人つきあひも御ざらぬほどに、いづかたへ成共まいり、歌道にすひた人に、ほうこう成共仕らふずると存る所に、承れば、いづみの国に、連歌にすひた者を、むこにとらふと高札をうつたと申ほどに、まづあれへまいつて、やうすを見うと存る。誠に是こそ天のあたへにてござる。いそひでまいらふ。

(8) 罷出たる者は、はりまの国の者でござる。某せがれの時より歌道にすひてござあるに依て、歌道においては世間に入こはひとぞんぜぬ。うけ給れば、和泉の国にうとく成もの、ありて、歌道のすぐれたるものを、むこにとらふと高札をうつたと申。某はいまだ妻をもちませぬ程に、あれへ参つて聾にならふと存る。誠に是はさいはひの事で御ざる。

(9) 「(かくすい)「いや／＼どれ／＼を、どれとも申されぬほどに、私の存るは、三人くじをいたひて、くじ次第にむこにとりまらせう。(河内)「いや／＼せんしだいになされひ。(淡路・播磨)「いや／＼うたにできふできがござらふ程に、歌次第がよふ御ざらふ。(かくすい)「是もえん次第の者で御ざるホドに、くじにとりあたらせしたが、えんが有とおぼしめせ。(淡路・播磨)「それはともかくもでござる。」

(10) 鷲流は、先に述べたように仁右衛門派の古写本(延宝忠政本、賢通本)は本曲を収録しない。伝右衛門派は宝暦名女川本「角水掣」が最古本となるが、「かくすい」を舅の名としない点や、歌に各自の国名と生業を詠み入れることを課さない点等、大藏流の改変の影響は受けておらず、古型である天理本に近い。しかし、高札を見た聾志願者たちのセリフに「面白おかしく申ないて聾にならふと存る」(播州方の者)、「誠かいつわりか参て見うと存る」

(河内方の者)等の加筆が見られる点、歌の一部が崩れている点、娘の顔を「不器量」とする点など、その本文には後世の改変が認められる。

- (11) 鷺仁右衛門派の近世中期から幕末にかけての台本である関西大学図書館蔵杭全家狂言伝書や山口大学付属図書館棲息堂文庫蔵『狂言本』(『山口鷺流狂言資料集成』山口教育委員会刊、二〇〇一年)に、「斯好智」の表記が見られる。仁右衛門派に固有の表記「斯好智」は、古写本を持たないことから伝右衛門派の表記「角水智」に同じく後代の宛字と判断されるが、本稿の読みを補強する。

- (12) 出された難題に対して、物名の歌を詠んでこれを克服する話の型としては、たとえば『かさぬ草紙』(神宮文庫蔵)所収の一話が指摘し得る。帝より「ひなさき」という難題を下されて困り果てた和泉式部は、北野天神へ詣る途上、「風ふかば」の五文字を囁く老翁に出会う。これによって式部は「よむべき便り」を得、みごとに物名の歌「風ふかばそのひなさきそ梅の花にはひのよそへ散るのをしきに」を詠んだ。

- (13) 『能楽大事典』(筑摩書房、二〇一二年)「かくすい」項。